

氏名(本籍)	ひら 平	おか 岡	とし 敏	お 夫	(香川県)
学位の種類	文学博士				
学位記番号	博乙第112号				
学位授与年月日	昭和57年12月31日				
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当				
審査研究科	文芸・言語研究科				
学位論文題目	北村透谷研究				
主査	筑波大学教授	文学博士	伊藤	藤	博
副査	筑波大学教授		富原	芳	彰
副査	筑波大学教授	文学博士	内山	知	也

論文の要旨

北村透谷(明治1~27年)をいかに評価するかは、日本近代文学史研究の試金石だと言われている。本論文は、詩人、評論家、さらには小説家でもあった北村透谷を、その全作品および周辺資料の解説を通して、日本近代文学史の総体の中に位置づけようとしたものである。B6版三巻から成り、各巻の組織は次のとおりである。

1. 北村透谷研究 昭和42年6月刊・291頁
 - 第1部 透谷像(2章)
 - 第2部 透谷前史(4章)
 - 第3部 詩と散文(8章)
 - 第4部 透谷の周辺(5章)
2. 続北村透谷研究 昭和46年7月刊・324頁
 - 第1部 透谷の文学像(3章)
 - 第2部 透谷その側面(4章)
 - 第3部 透谷の周辺(3章)
 - 第4部 文学史のなかの透谷(3章)
3. 北村透谷研究第三 昭和57年1月・399頁
 - 第1部 透谷像(2章)
 - 第2部 透谷像の一齣(4章)

第3部 透谷その側面（8章）

第4部 透谷その時代と系譜（6章）

第5部 透谷その研究と批評（2章）

（各巻とも「透谷研究文献目録」を付す）

本論文は、それぞれ第1部に透谷像についての論述を用意し、本論文の透谷像が従来のそれをいかに受けとめ、どのように発展させたかを述べる。

まず、1の第1部第1章（透谷像序説）においては、戦後十数年の透谷の評価が、小田切秀雄の考察に代表されるように、近代的自我の確立者、ないしそのための苦闘者という位置づけの上であり、明治絶対主義という実現の絶望的な対立による孤独な闘いという側面を強調するのを主流としているとし、これは、戦後の近代文学研究が、敗戦まで支配的であった超国家主義への嫌悪、否定に傾くあまり、国家、民族を排除する西欧的な近代的自我中心の文学史観に覆われたことを背景とする透谷像であると説く。

しかし、かような射程の中に閉じこめるだけでは、透谷の実像は把握できない、竹内好が唱えた国民文学論、あるいは、中村光夫、飛鳥井雅道による政治小説論の方向をも尊重する総合的視野に立つことが大切だとしつつ、透谷の魅力の中心に、当代としては稀な「国民」（平民）への強烈な関心があったことを述べ、「国民大衆からの孤立」（小田切）ということは基本的には言い得るのだが、と同時に、逆に、「透谷にあっては国民大衆に自己をかけることで自己の主體的眞実を守りぬいたとも言えるので、こういう存在であったからこそ、民権運動敗退後の明治20年代にきわめて独自の活動を展開し得たのだと思う。この矛盾した透谷の内面に私はいいような彼の苦渋の色をみる。（中略）この苦渋によってくるところのもの——現実を拒否し観念世界にわけ入りながら、しかもあくまで、「国民」に自己をかけて生きようとする、これこそ透谷を透谷たらしめたものである」（7頁）と論ずることで、1の第1部第1章は閉ざされる。続く第2章（透谷における「文学史」）は、第1章の主張を、従来の透谷論がほとんど取り上げなかった『日本文学史骨』（明治26年）を対象とすることで、透谷の文学史意識の中に読み取っている。

2の第1部は、1の第1部が提唱した透谷像に対する学界の反響を受けとめながら再論することで、射程の拡大と持論の充実とを図ったものであり、3の第1部は、新たに、透谷作品に現われた富獄の論を取り入れ、先代の藤田東湖や同時代の志賀重昂とも比較しつつ、懸案の透谷像を補強している。

本論文三巻の第1部が本論文の序論、ならびに総論であるとすれば、第2部以下は、作家論、作品論、および文学史論の立場から、第1部の論を実証的に裏づけかつ拡充した、各論といえることができる。

すなわち、1の第2部は、透谷が文学者として自立する以前（明治20～21年以前）について考察を進め、政治・恋愛・入信をめぐる、書簡・手記・当時の新聞・実地調査等によって、透谷文学成立の基盤を明らかにしている。これを受けて、2の第2部（4章のうち前半2章）は、透谷の家系・家族・環境について、著者発掘の資料を活用しながら、透谷が透谷として育ってきた所以を論じて

いる。3の第3部は、前2論の主旨をさらに押し進めた考察で、透谷における政治と文学とのかかわりに重要な意味を持つ富士登山の時期を、当時の新聞資料を駆使することによって明治17年と決定し、一方、小田原藩に蔵せられたいくつかの古文書を検討することによって、北村家の家系に関する論説に決着をつけている。またここには、小学生北村透谷が学んだ教科書（小学化学書）の考察を通して、透谷の素質を探ろうとする試みも含まれている。

1の第3部、2の第2部(4章のうち後半2章)、3の第3部は、透谷の作品のほとんどすべてに対する具体的な考察で、本論文の中核をなす。ある時は作品の個別な読解を繰り広げ、ある時は複数の作品を通して一つの主題を論じ、その内容は、詩論・戯曲論・小説論・散文論・恋愛論・女性論・生命論・発想論・幻界論・自然論・国民論など、透谷が関心を寄せた全領域に及んでいる。多岐にわたるその内容を要約することは困難であるが、1の第3部第7章（内部生命論）の結びに、「死んだ“貴族的思想”のまだ充満していた明治20年代にあつて、その暗さにふたがれねばならぬ自己を一方で深く認識しながら、それを否定すべく、透谷の眼は宇宙の精神につながる人間の“内部の生命”に、そして国民の“内部の生命”（元気）に向けられていた」（194頁）と論ずるところが骨子であり、結局は、第1部に説く透谷像の、文献解読を通しての確立にかかわっていると見える。

最後に、1の第4部、2の第3部、3の第4部は、透谷論をめぐっての実証的な文学史論である。1の第4部と2の第3部とは、透谷と山路愛山、中西梅花・島崎藤村・高山樗牛等との比較検討により、3の第4部は、同時代人としての森鷗外・幸田露伴とのかかわりから、昭和期の「夜明け前」や芥川龍之介・太宰治に至る透谷の水脈の検証により、透谷文学が明治初期浪漫文学の中核的存在でありつつ、爾後の近代文学の展開に多大な影響を与えたことを説いている。続く、2の第4部と3の第5部とは、透谷に関する現在の研究と批評とについて、論争を含めながら論評を加えることで、本論文の透谷論とその方法とを明確にしている。

なお、各巻に付された「透谷研究論文目録」は、明治26年から昭和57年に至る、透谷に関する単行本、雑誌特輯、講座論文、雑誌、新聞、単行本所収論文をほとんど網羅した労作で、本論文が諸々の資料や先学の説を重視しながら論を展開していることと密接にかかわっている。

審 査 の 要 旨

透谷は、その格調高い文章故に、戦前、青少年のあいだに少なからぬ読者層を持った。しかし、透谷が近代文学史論の対象として重視されるようになったのは、主に戦後のことである。プロレタリア文学理論の立場から、戦前(昭和4年)、透谷を高く評価した中野重治の再度の発言(昭和21年)を契機に透谷研究が盛んになり、小田切秀雄に代表される人々によって、透谷は、明治絶対主義権力に対立しつつ、近代的自我を確立するために苦闘した悲劇の文学者と見なされるに至った。この見方には批判もあり、伊藤整や猪野謙二は、その成果を評価しながらも、文学史整序の基準が、現実に対していかに闘ったかという求道者（高音部）の側ばかりに立ち、裏にある認識者（低音部）

の面が切り捨てられているとし、近代的自我中心の文学史観は、透谷や啄木などを過大評価するゆがみを生んだと評した。

この二つの潮流を受けて立ったのが、本論文北村透谷研究である。昭和34年『『楚囚之詩』の発想』（国語と国文学）を以て学界に打って出た著者は、戦後十数年にわたる上述の透谷研究の潮流を見定め、提唱されたままで動きを伴わなかった。昭和25年の国民文学論や昭和34年の政治小説論が志向した文学史再検討の立場を取りこみながら、透谷の実像を明確するためには、同時代の文学者、文学状況、社会状況等に視野を及ぼす共時論的な研究と、近世の文学から明治・大正・昭和の文学に至る流れに眼を向ける通時論的な研究と合せ行う総合的姿勢が肝要であることを提唱した（昭和37年）。爾来30年、成果は蓄積されて本論文三巻となった。見て来た通り、その精密にして骨太い考察は、戦後透谷研究のみならず、近代文学史研究の一大潮流を成すものとして、高く評価することができる。

本論文は、総合的・多角的であることを実行に移しただけきわめて精力的であり、かつ、資料の綿密な解説を基本にしている点に特色がある。また、透谷に関する先人の説を普く解説し、問題点すべてについて誠実・果敢に挑みながら自説を打ち立てている点も大きな特徴である。いうならば、全篇論争のつぼとも称すべき激しさが歴史性と実証性とを尊重する姿勢に支えられているために、研究史に一脈を築くと評価しうる独自の透谷像を樹立するに至ったと見なすことができる。

その透谷像とは、すでに述べたように、実世界においては国民から孤立しながら、しかもなお、想世界においては、類稀な執心を以て国民の元気（平民の根源的生命）に自己の存立をかける、一見矛盾する葛藤の世界に生きかつ死んだ点にあり、それ故にこそ、透谷は近代文学の形成と展開に多大な影響を及ぼす文学者（言語によって苦悩する人）たりえたとする点にある。

対して、部分的な独創性を言えば、際限がない。中で、各篇の第2部において、従来の透谷研究が軽視していた、透谷時代の新聞記事を新資料として把え、透谷がその記事の読者であったことを立証しながら、透谷の生い立ちを探っていく点、小田原藩に伝えられた北村家にかかわる古文書を発見して、これまで明確でなかった北村家の家系を見定めた点などは特記するに値し、これは、近代文学研究が往々にして作文に奔る姿勢を暗に戒めた批評として読むこともできる。さらに、『文学史骨』を透谷の代表作の一つと見据えた眼力、愛山と透谷との比較考察において双方の立場に立ちながら双方を見つめて新見を導いた視野の客観性なども、本論文を象徴する事柄と言ってよい。

かくして、今後、透谷研究は言うに及ばず、近代文学史研究そのものも、本論文の考察を踏まえられないでは、前進を約束することが困難であろう。

とは言え、離点と見なされる面がないわけではない。歴史的資料を普く呼び込み、それを丁寧に解説したり論破したりしていく誠実を極める態度が、逆に、論述の錯綜や熱意の先走りになって現われている面がまま見受けられる。また、本論文は、学界に向ってその都度訴えた透谷論を、発表年限を区切って構築するという漸層性を持つために、発言の重複が目立つ。この点に関しては、本論文を土台に据えての、純一な透谷論の書き下しを期待したい。

一方、著者は、透谷の魅力をいくたびか力説しているが、いかなる点に魅力があるのか、いささ

か鮮明でない嫌いがある。これは、本論文の主たる関心が透谷の発言内容にあり、それをいかに表わしたかという、構成論、文体論、語彙論等々、表現の面に対する追究に関して手薄であることに原因があろう。透谷には、幸いに、勝本清一郎が半生をかけてまとめた全集三巻がある。これに著者発見の資料をも加え、著者独自の本文校訂や注解作業が発表されるならば、今日、40代以下の読者にはすでに難解であるはずの透谷の魅力を普遍化する強力な道が拓かれるであろう。

むろん、このような批判は、隴を得て蜀を望むに近い。その真摯で旺盛な学究の姿勢には万人の追随を許さぬ力があり、それ故に樹立された、精密にして骨格豊かな考察は前人未踏の重みを持つと言ってよい。学界を領導してやまないと認められる本論文の価値が、この批判によって揺ぐことはない。しかも、本論文には、参考論文として、

- (1) 日本近代文学史研究 昭和44年6月・497頁
- (2) 明治文学史の周辺 昭和51年11月・592頁
- (3) 漱石序説 昭和51年10月・464頁

の大著三冊が添えられているが、これは、本論文の考察を基点として、著者の日本近代文学史像の構築をほぼ達成した業績で、著者の研究はすでにここまで及んでいることを思うべきである。

よって、著者は文学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。